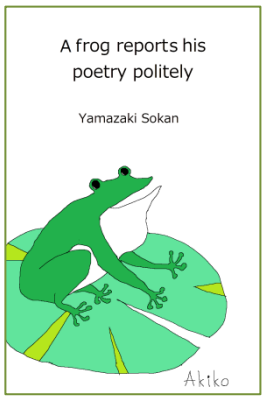
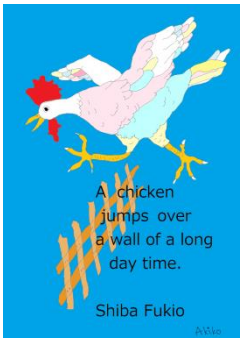
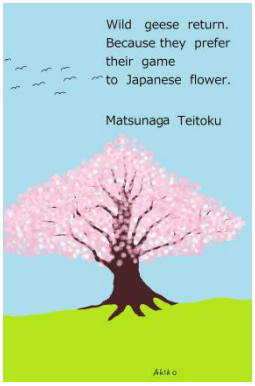
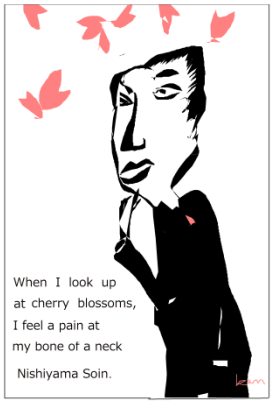
HAIKU HISTORY with ART

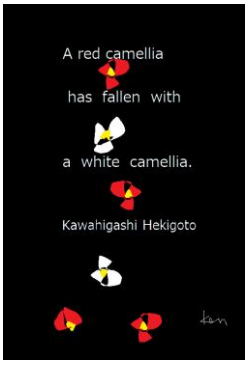
「俳句アート」で辿る俳句の歴史　入場無料







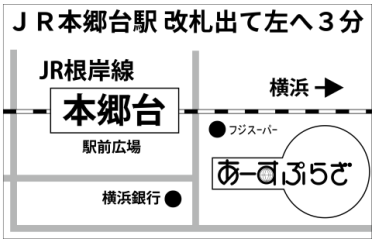




日本を代表する俳人の代表句に２人のアーティストがアートと英訳をつけました
「俳句アート」を楽しみながら俳句の歴史を辿ってみませんか

会期：2019 年 4 月 1 日(月)～ 5 月 31 日(金)　9 時～17 時
＊会期中無休。5 月 18 日と 19 日は、雨天の時は会場を
「情報フォーラム」に移動して展示します。

会場：地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）2 階 展示コーナー
〒247-0007 横浜市栄区小菅ケ谷１－２－１



堀川明子（Horikawa Akiko）　滑稽俳句協会会員　第一松風会句会会員
1967 年生まれ。嵯峨美術短期大学洋画科卒業。第 10 回滑稽俳句大賞受賞。
滑稽俳句協会会報や愛媛ＣＡＴＶ「八木健の俳句遊遊」にて俳句アートを発表。

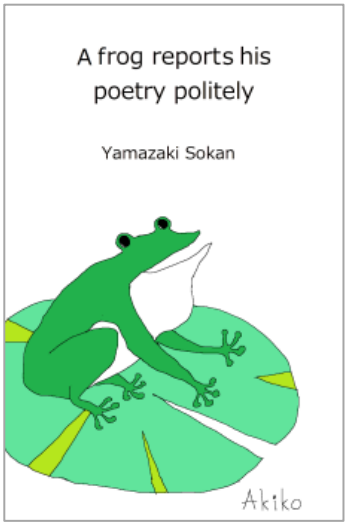
八木　健（Yagi Ken）　滑稽俳句協会会長　俳句美術館館長
1940 年生まれ。日本大学芸術学部卒業後、アナウンサーとしてＮＨＫに入社。
現在、新聞や俳句雑誌の選者、審査員の他、愛媛ＣＡＴＶより俳句、川柳番組を放送。

【お問合せ】 俳句美術館　090-8287-1390　＊取材や展示内容について
あーすぷらざ　045-896-2121　＊会場や日程について

【主催】俳句美術館　**【共催】**神奈川県立地球市民かながわプラザ
（指定管理者：公益社団法人青年海外協力協会）

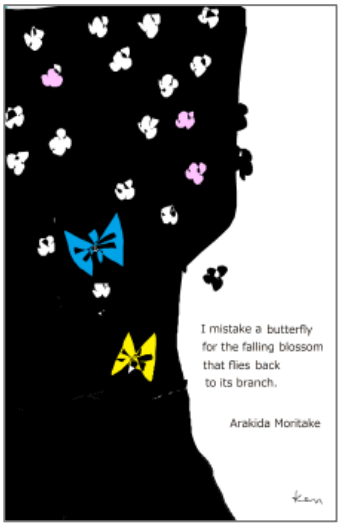
俳句美術館　神奈川県立地球市民かながわプラザ あーすぷらざ

HAIKU HISTORY with ART



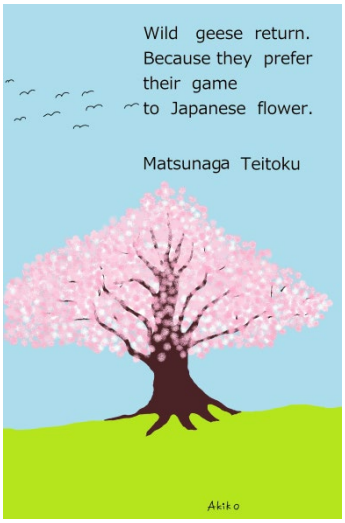
手をついて歌申しあぐる蛙かな

山崎宗鑑（1465～1540）
室町時代の連歌師
俳諧の祖



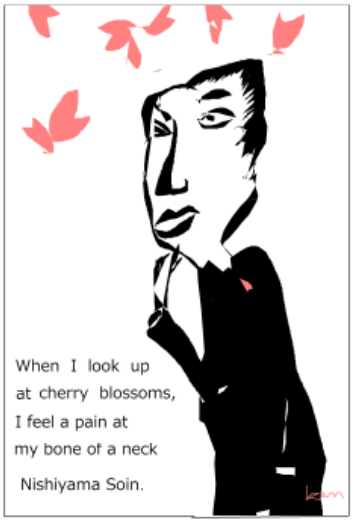
落花枝にかへると見れば胡蝶哉

荒木田守武（1473～1549）
室町時代の連歌師
俳諧の祖



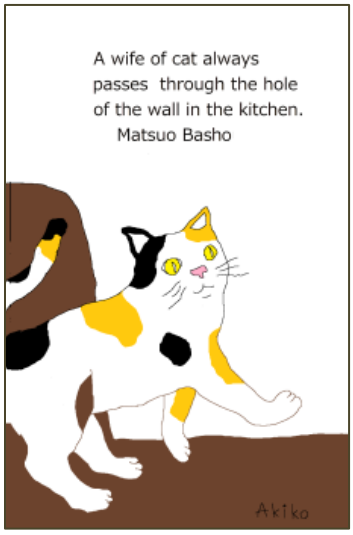
花よりも団子やありて帰る雁

松永貞徳（1571～1653）
江戸時代初期の俳人
言語遊戯の作風



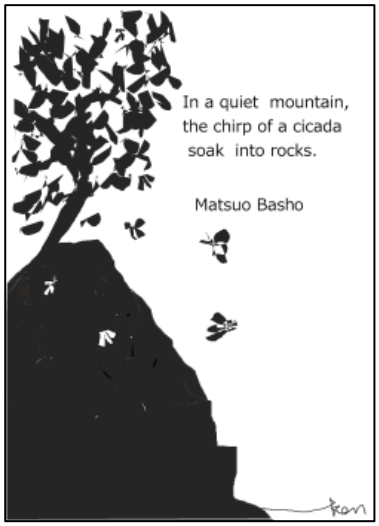
ながむとて花にもいたし頸の骨

西山宗因（1605～1682）
江戸時代初期の俳人
軽妙で自由な作風



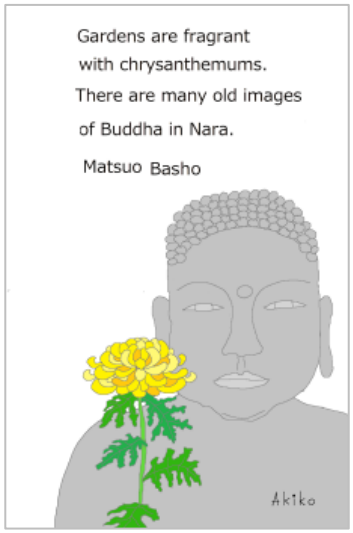
猫の妻へつひの崩れより通ひけり

松尾芭蕉（1644～1694）
江戸時代中期の俳人
俳句を芸術に高める



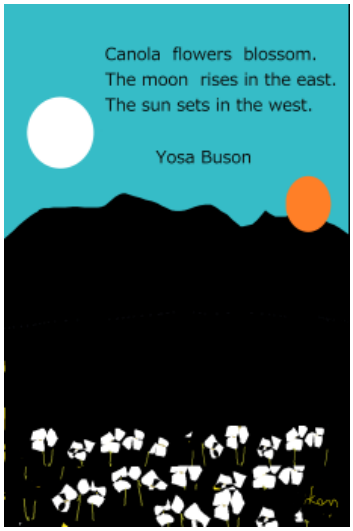
閑さや岩にしみ入る蝉の声

松尾芭蕉（1644～1694）
俳句の神髄を希求
「わび」「さび」の美的理念を確立



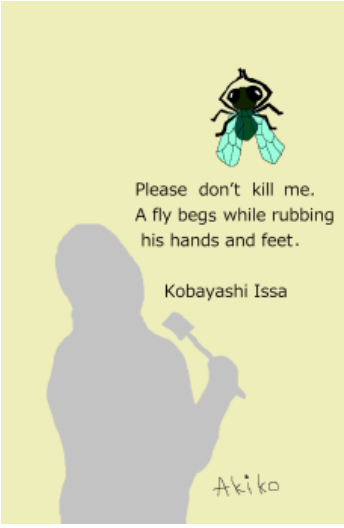
菊の香や奈良には古き仏たち

松尾芭蕉（1644～1694）
俳聖と呼ばれる



菜の花や月は東に日は西に

与謝蕪村（1716～1783）
中興の祖
画俳両道で知られる



やれ打つな蠅は手をすり足をする

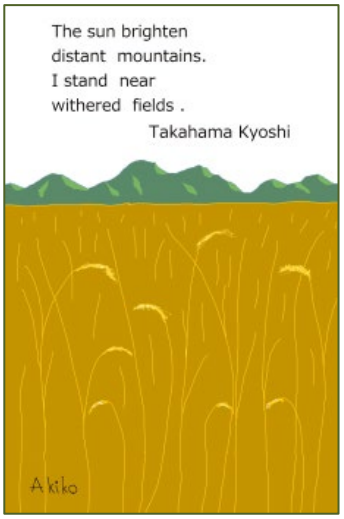
小林一茶（1763～1827）
異色の滑稽俳人
生活感・人間味のある作風

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規（1867～1902）
俳句の父と呼ばれる
俳句の手法として「写生」を唱えた

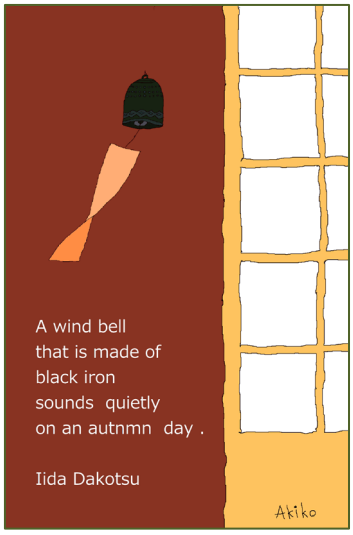
赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐（1873～1937）
新傾向俳句の先駆者
正岡子規の二大弟子の一人



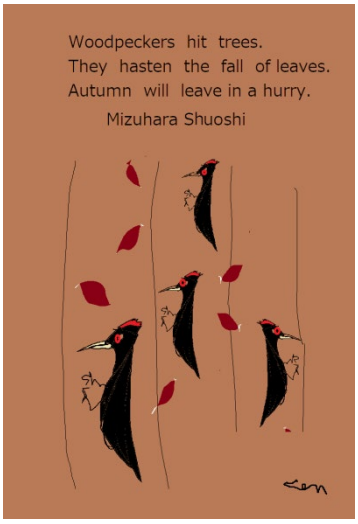
遠山に日の当りたる枯野かな

高浜虚子（1874～1959）
花鳥諷詠を唱えた大正・昭和の俳壇の雄
正岡子規の二大弟子の一人



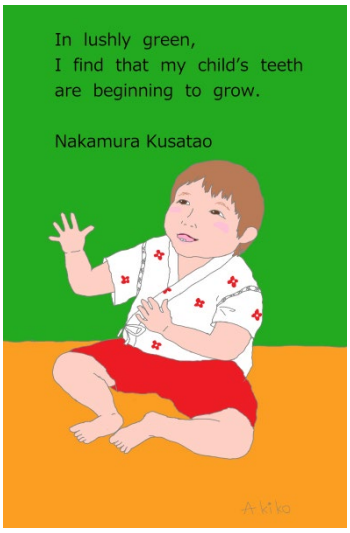
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田蛇笏（1885～1962）
荘厳で格調高い作風



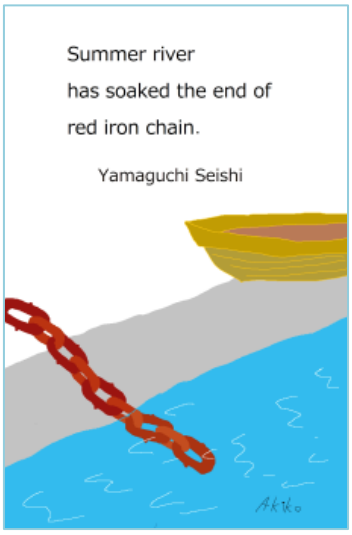
啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

水原秋桜子（1892～1981）
主観的抒情を追求
近代俳句に新感覚をもたらす



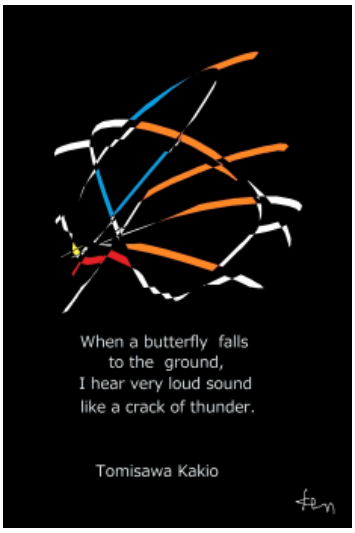
萬緑の中や吾子の歯生えそむる

中村草田男（1901～1983）
人間探求派
詩性と社会性の融合を目指す



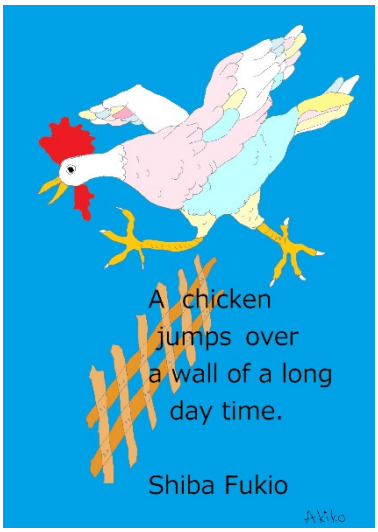
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

山口誓子（1901～1994）
新鮮な表現と力強い描写で昭和俳壇を牽引



蝶墜ちて大音響の結氷期

富澤赤黄男（1902～1962）
新興俳句の雄



永き日のにはとり柵を越えにけり

芝不器男（1903～1930）
抒情溢れる作風

雉子の眸のかうかうとして売られけり

加藤楸邨（1905～1993）
人間探求派
生活に即した人間性を追求

手花火を命継ぐ如燃やすなり

石田波郷（1913～1969）
人間探求派
重厚な抒情性